洛友會報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気系教室内
洛友会

向暑の砌、会員各位の御健康をお祈り申し上げます。

洛友会会長　松田　長三郎

新会員へのお祈り

□ 今年も早、六月になりました。新たに学部に進学された方々、実社会へ出られた皆さん、如何お過しですか、十分健康に留意せられて新境地でのご活躍を祈念する次第です。どうかお元気で、頑張って下さい。

□ 今や交通信機関の発達の結果、世界は益々狭くなって来ました。これに反し私共の活躍の場は愈々、広くなって来ました。私が初めてドイツへ行ったのは昭和六年で、今から五十年前でありますが、当時の欧米は、共に遠い国々でありましたが、今では、十数時間で行くことが出来ますから、世界は狭くなった感じですし、外国へ出かけられる人達も、近年非常に多くなって来ましたことは、大変結構なことです。

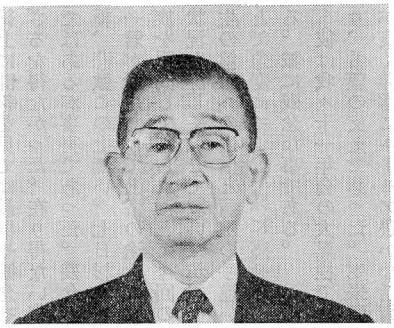
当時、京都大学では、毎年各学部から一人づつ、在外研究員として海外へ派遣されていましたが、工学部のような大学部と、定員の少ない学部と、同一の人員とは、不合理であると訴えて、工学部は二名となりました。現在は、そうではありませんが、当時は、助教授から教授への昇任には在外研究が必要でありました。この在外研究員の制度は、当時の我国の文化の発展に大きな貢献をなして来たことは明らかで、当時の為政者の政策には頭の下がる思いです。

□ 私の若かった時代と今日では我が国の国際的地位も全く変り、地球の広さも昔の比ではありません。今の若い人が海外に行かれることは日常茶飯事であり、外国へ赴くことにあまり感慨もないかも知れません。しかし若い人も昔と同様、進取の気持を忘れずに諸外国で頑張って頂きたいと思います。

大森武司君を偲ぶ

森　元　行（昭和十一年）

（去る三月三十一日同級の大森武司君が急死し、四月三日の葬儀で弔辞を捧げました。）



大森君、五十年昔に戻ってそう呼ばせて下さい。

つい先日、元気でお話したのに今日こうして、お別れの言葉を申上げることになり、余りにも思いがけないことで、未だに信じられない気持で一杯です。

君の輝やかしいご生涯は先に植田社長が述べられましたので、私は思い出などを少しばかり申上げて、ありし日の君を偲びたいと思います。

昭和八年から三年間、京都大学電気教室でご一緒に勉強しましたが、君はいつもトップの成績で、その上明るく朗らかで人望があり推されてクラス総代となり、よく皆の面倒を見てくれました。これは卒業後も続けられ、クラス会等いつも中心となって頂きました。近年のクラス会や洛友会の旅行では、奥様もご一緒で楽しく過しましたが、今は懐しくも悲しい思い出となりました。なお二十五周年の時は、皆の家族写真を集めて、立派な記念アルバムを作って頂きましたが、これは君の心のこもった形見として永く大切に致します永い間同窓のお世話を頂き、一同心から感謝しております。

昭和十一年春卒業して君は住友電工に入社され、私は大阪の電力会社に入りましたが、既に戦時下でお互に軍隊に召集されるなどし終戦後まで連絡とれませんでした。この間君は昭和十二年支那事変が始ると直ぐ召集されましたが、当時は召集兵から将校になる途が無いまま、一兵卒として大陸へ渡り大変苦労され、遂には右眼を失い右手指も負傷されました。

しかし、君はこの大きなハンディを乗越えてコンデンサの研究開発に取組まれ、数々の業績をあげ博士号を受けるなど、斯界の第一人者となられました。これは私共学友の大きな誇であります。君の手がけたコンデンサが今や全国各地何千個所の変電所で電力系統の要として日夜働いています。このことだけでも、君以て瞑すべしと申上げたい次第であります。

君は終戦後コンデンサと共に日新電機に移られ、私は電力再編成で関西電力に移り、この頃から仕事の上で関連ができ、また昭和四十三年から私が日新電機でお世話になり、全く不思議なご縁でした。

君は学生時代から浪曲が得意で卒業コンパでの一席は今でも覚えております。その後長唄を勉強し名取になられ、クラス会ではいつもご披露願っていましたが、あのいいノドももう聞けなくなって、残念でなりません。また君は、麻雀が好きでよくやっておられましたが、その成績を克明に記録して時々公表しておられました、これもまた懐しい思い出となりました。

君は小柄ながらいつも元気だ、私などと違って酒も飲まず、近年はアスレチッククラブに通うなど健康に気をつけておられましたので、クラスでは一番長生きされると思っていましたのに、こんなに早く逝くとは、つくづく人の命の

はかなさを感じております。

昨年は、徳岡君、福中君、鈴木君、毛利君と四人が亡くなり、今また君を失ってとても寂しくてたまりません。今やあの世の方が賑やかになってしまいました。どうか皆と長唄を唄ったり、好きなレコードを聴いたり、麻雀をやって楽しんで下さい。

ここに五十余年に亘る暖いご交誼に改めて厚く御礼を申上げ、安らかなご冥福を祈ります。名残は尽きませんが、それでは大森君、さようなら、さようなら。

大正十四年卒

一本松珠璣氏追悼　十首

大正十五年
日立電線　小宮義和

孤松大人より歌賜びしこと屢々なりき
今拙き歌を捧げて哀悼を表す

訃報

黒土に白き山茶花一つ落つ六十年仰ぎし君けさ逝けり

三高入学「自由の洗礼」

諄々と説きます自由の「洗礼」や幾何証明さながらと友言ふ

明石海峡ケーブル敷設

ともしびの明石の浦にケーブル敷き淡路の島に電気送れり

人工降雨

大空に沃化銀蒸気吹上げて八大龍王雨給べと請はず

原発建設

原子力かしこに開くか水平線松原はるか櫓立つ見ゆ

原発落成

原子力発電成りてテレビに映りゐる作業衣の君の涙ぐましき

宮島にて

弥山より瀬戸内の海開け見ゆ君の故郷能美島も見ゆ

夫人入院

はからずも転びて物いはずなりし妹を日日病院に見舞ひ給へり

十四日家族旅行二十四回

妻連れて旅する望みいま絶えて数々の思ひ出ただなつかしき

永眠

春浅く梅まだふふまず五年をみとりし妻置き君逝きませり

(六〇、四、一五)

昭和十一年会の歎き

古池弘正

大森武司君が急逝した。三月三十一日午後七時頃森元行君から報せて来たが其の声は非常にうわづって居た。そんな馬鹿な事がと疑い乍らも在京の諸君には一応報告して置いた。併し四月二日の新聞紙上に訃報を見ては最早や観念せざるを得なかった。在り得ない事ではあるが事実であった。残念至極、悲歎この上無い。七日杉本省一君が所用あって上洛の途次御家族を弔問して来られたとて今回の状況を詳しく報せて載いたが、平生の健康への過信と病院の手違いとで急変に至った様に感ぜられる。誠に残念な事である。

彼は我々十一年会の大黒柱であり、希望の支えであった。生来頭が良く非常にユーモア豊かな話術で我々をなごやかにして召れる人であった。住友電工から日新電機に移り彼が中心になって開発した電力用コンデンサが国内を席巻すると共に世界に羽ばたく相を紙上に見るのは我々の誇りであった。

彼が昭和十二年支那事変と共に召集され、大陸に戦ったとの事はずっと後から知った。そのお陰で右眼を失い右手人さし指が曲らないでいる事により彼の苦労不幸を知った。併し彼はその苦痛を他人には全然気付かせなかった。相変らずというより一層ユーモアには磨きがかかり、人を楽しませて呉れた。彼は天性邪気のない人であった。よく人の面倒を見る人であった。我々は彼の、そして彼の良きパートナーである奥さんの、つまり一家を挙げての饗応で同窓会は非常に楽しく盛大にさせて貰った。有難い事であった。

彼はゴルフはしなかったがその代り長唄は名取りであった。僕も地方で一時期熱心に習った事があったので、おだてられて口づさんだ事もあるが、彼のそれは流石と感服した。下手な芸者衆のとても及ぶ所ではあるまい。

彼は麻雀を楽しんだ。会の後最近は、やっていないからと拒むのも押して参加させられ、ガッポリ取られた事も今となっては懐かしい思い出となって仕舞った。惜しい人を喪った。残念である。全く思わぬ事であった。

我々は一昨年五十八年十月に伊豆下田で総会を持った。いのちのある中に会っておこうという趣旨からである。それから後に、昨年七月に徳岡君を、十一月に福中君を、十二月に鈴木君と毛利君の二人を、そして今年三月に大森君を、一年足らずの間に合計五人の仲間を失ってしまった。年次欄だけから云えば行方不明の野田、水上両氏を除いて二十四名が十九名に減ってしまった。前後の年次に比べて誠に寥々たる相になってしまった。寂しい限りだ。

徳岡毅君は心臓痲痺で急逝せられた。訃報は大森君からであった。四国電力副社長を経て四電技術コンサルタント社長の現職のまま出来事である。彼は同窓会には必らず出席していた。最近は奥さん同伴であった。その頃から多少心臓に不安を感じていたのであろうか。彼はゴルフを愛していた。京都での会にはわざわざ重いバッグを担いでやって来て、前田、森、毛利をやっつけて帰ったとか。終始笑顔を絶やさぬ静かなそれでいて芯の強い人だった。惜しい人だった。

福中希生君は三菱電機取締役伊丹工場長をしていた。当時彼が部下を非常に可愛がる人だという事を、彼の所に出入りしていた下請会社の社長から聞いた事がある。学生時代は大森君と異ったユーモリストであった。又囲碁に熱心であった。相当の腕前になって居られた事と思う。五十六年の京都の総会ではお目にかかったが、その頃既に肝臓病があると云って居られた。矢張り肝不全でなくなっている。之の報せも大森君がして呉れた。

十二月に入って今度は鈴木重次君が亡くなったと森君が報せて呉れた。同窓会には一度も出て居られなかったのでピンと来なかったが、卒業アルバムを見て解った。非常に無口でおとなしい人であった様に思う。尼崎市立尼崎産業高校教諭をして居られた。

年末も近くなって又大森君からの電話で、今度は毛利正登君が長い病院生活の末遂に亡くなったと報らして来る。最近京都からの電話は碌な事はない。

毛利君は大阪変圧器常務を経てダイヘンエンジニヤリング社長を勤めた。脳出血をやり入院していた由。生来酒を愛し若い頃は音楽レコードに熱中していたとか。彼もゴルフと麻雀が好きであった。強度の眼鏡をかけていた。箱根大会では之亦バッグを担いでやって来た。一緒に廻った事を思い出す。惜しい人だったが、止むを得ない。

以上亡き友を思い出すまま偲んだが、最後になって当時元気で一々夫々の不幸を歎き乍らも報らせて呉れた当の御本人である大森君が遂に倒れてしまった。誠に残念なことである。

茲に改めて御逝去の諸賢の御瞑福を衷心より祈る。

諸行無常！　我々も何時御迎えが来ても唐突とは云えない年令に達している事を改めて感じさせられる。「誰か明日死のある事を知らんや、誠に彼の大軍と会わずという事なし。」我々凡人としては「生かされて生きている」事実を自覚し感謝して、充分の健康留意の上、出来る丈け周囲に御迷惑を掛けぬ事を願いつつ、天命を全うすべく一日一日を大切に生きる以外に、道は無かろうと思う次第である。

教室だより

教官の移動

前号のお知らせ以降、つぎのような異動がありました。

大村　善次

昭和60年5月1日　電気工学第二教室（木村研）助手に新任（昭和55年電子工学科卒）

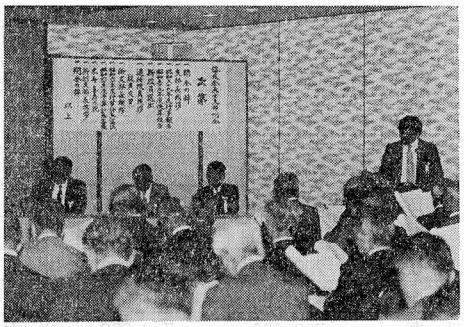
総会だより

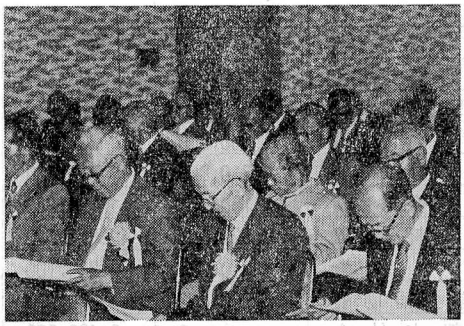
昭和60年度 洛友会東京支部 総会報告

昭和60年6月1日（土）、目黒『八芳園』において東京支部総会が開催された。当日は天気に恵まれ、奥原大先輩（大15卒）を始めとして、本年4月に社会人に仲間入りしたフレッシュマン含めて、一〇七名（内同伴者一名）という数多くの方々が出席された。まず昭和59年度行事報告および決算報告が承認され、続いて新役員として、老田他四郎支部長（昭20卒）、日下部悦二副支部長（昭21卒）、来山征士総務幹事（昭42卒）および木戸出正継会計幹事（昭43卒）が選出され、新旧役員が交替した。

引続いて、昭和60年度行事計画および予算計画の審議に入り、これらの計画は原案通り承認された。恒例により、昭和60年に米寿を迎えられた二名の大先輩および喜寿を迎えられた一〇名の大先輩にそれぞれ記念品をお贈りして長寿をお祝いし、支部総会を閉会した。

引続き開かれた本部総会の終了後、同じく『八芳園』において本部および支部総会の出席者の懇親パーティが開かれた。近藤文治名誉教授（昭18卒）の乾杯の音頭、喜寿を迎えられた大先輩のご挨拶、今回はご都合がつかずご欠席の洛友会会長松田長三郎先生から頂戴した祝電の披露等があり、古き学生時代のことから最新技術まで幅広い話題に花が咲き、時を忘れた一時を過した。最後に、洛友会の歌を全員で唄い、再会を誓い合って散会した。





尚、昭和61年度支部総会は昭和61年6月14日（土）同じく『八芳園』で開催の予定である。

昭和60年度 洛友会総会

昭和60年度洛友会総会は、去る6月1日（土）東京目黒八芳園において午後3時より行われた。今年はご高齢にもかかわらず毎年必ず総会にご出席になり冒頭のご挨拶をされる松田会長がご欠席になり、少し淋しく残念でもあった。

まず竹村幹事司会のもとに、松田会長に代り近藤幹事の挨拶に引続き、同幹事より昭和59年度事業報告及び昭和60年度事業予定並びに役員改選案件について説明があり、これに続いて竹村幹事より昭和59年度収支決算報告及び昭和60年度予算案の説明があり、以上各

案件を審議の結果、原案どおり可決されました。
（59年度決算、60年度予算については別表参照のこと）
引続き板谷教授から電気系教室の近況が報告されました。

洛友会役員変更について

前回発行しました名簿に記載されております洛友会役員中、左記のとおり6月1日の本部総会において退任及び新任が承認されました。

記

幹事　大7　間崎龍夫（死亡）
　　昭20　山口春男（退任）
評議員　講大8　近藤勇次郎（死亡）
　　講大11　高野市太郎（死亡）
　　講昭13　神戸　俊夫（新任）

以下新任

昭34　長尾　真
〃35　中島　将光
〃37　松波　弘之
〃39　酒井　保良
〃54　今堀　清
〃55　岩井　明彦
〃56　白井　康之
　　西尾　勉
乾　義尚

昭和59年度収支決算

昭和59年4月1日から昭和60年3月31日まで

収入の部　（単位　円）

科目	決算額	予算額
会費(学部)	7,609,700	6,600,000
〃（講習所）	873,000	530,000
預金利子	305,574	300,000
広告掲載料	120,000	120,000
雑収入	41,000	10,000
小計	8,949,274	7,560,000
前年度繰越金	7,161,094	7,161,094
合計	16,110,368	14,721,094

支出の部

科目	決算額	予算額
名簿編集費	0	15,000
〃 電算機処理費	1,268,052	815,000
〃 印刷費	38,000	0
〃 発送費	0	0
会報編集費	10,400	10,000
〃 印刷費	797,000	750,000
〃 発送費	1,330,226	1,250,000
備品費	615,800	0
通信費	130,330	60,000
会合費	228,444	360,000
総会費	313,000	300,000
集金費	159,830	250,000
消耗費	327,120	79,000
旅費	304,100	300,000
懇話会補助費	200,000	200,000
支部交付金	2,430,500	2,431,000
事務人件費	720,000	720,000
雑費	20,430	20,000
支出小計	8,893,232	7,560,000
次年度繰越金	7,217,136	7,161,094
合計	16,110,368	14,721,094

預金及び現金

昭和60年3月31日現在

信託預金	1,000,000	普通預金	659,621
定期預金	5,267,600	郵便振替	234,530
当座預金	241	現金	55,144
		合計	7,217,136

昭和60年度収支予算

昭和60年4月1日から昭和61年3月31日まで

収入の部　（単位　円）

科目	予算額	59年度決算額
会費(学部)	7,000,000	7,609,700
〃（講習所）	600,000	873,000
預金利子	300,000	305,574
広告掲載料	2,600,000	120,000
雑収入	10,000	41,000
小計	10,510,000	8,949,274
前年度繰越金	7,217,136	7,161,094
合計	17,727,136	16,110,368

支出の部

科目	予算額	59年度決算額
名簿編集費	10,000	0
〃 電算機処理費	200,000	1,268,052
〃 印刷費	3,500,000	38,000
〃 発送費	1,300,000	0
会報編集費	10,000	10,400
〃 印刷費	860,000	797,000
〃 発送費	1,400,000	1,330,226
備品費	0	615,800
通信費	100,000	130,330
会員原簿管理費*	800,000	0
会合費	300,000	228,444
総会費	310,000	313,000
集金費	150,000	159,830
消耗費	320,000	327,120
旅費	310,000	304,100
懇話会補助費	200,000	200,000
支部交付金	0	2,430,500
事務人件費	720,000	720,000
雑費	20,000	20,430
支出小計	10,510,000	8,893,232
次年度繰越金	7,217,136	7,217,136
合計	17,727,136	16,110,368

* 新設科目（電子計算機処理費）

石上　和宏
川勝　孝治
〃57　喜多　一
中島　重義
鷲見　和彦

中部支部総会

五月二十五日通信ビルで開催しました。大学から卯本重郎教授がご出席下さいましたが、本年は松田会長の元気なお姿を見ることができず残念でした。

総会は本多支部長の挨拶のあと、まづ59年度の行事と60年度の行事予定の説明がありました。60年度の行事としては懇親囲碁会（7月13日）・懇親ゴルフコンペ（9月29日）・名大プラズマ研究所見学会（10月12日）の開催がきまりました。つづいて59年度の決算と60年度の予算が承認されました。

さて、役員改選ですが、昨年の支部総会で本多支部長から米寿を迎える機会に支部長を若い人にゆづりたいという申出がありましたので、本年の総会に先だつ役員会で後任支部長を銓衡することになっていました。その約束に従って去る四月七日に役員会を開きましたが、二十数年間の永きに亘って留任を重ねてこられた本多静雄先輩（大13卒）こそは中部支部のシンボルであり誇りでもあるのだから同先輩が健在である限りはこのシンボルと誇りを持続すべきだという意見が絶対的多数を占めましたので、総会では本多支部長に退任申出を取り下げていただくようお願いして承認されました。しかし、中部支部の今後の運営の活性化を期待する意味でこれまた二十数年に亘って留任をつづけてきた副支部長の田中卓二先輩（大15卒）と総務幹事の古田久一先輩（昭6卒）は評議員に移り、これに代って大野彰氏（昭25卒）が新副支部長に、また前原恒之氏（昭28新卒）が新総務幹事に選出されました。その他については特に発言がなかったので以上で総会を閉じました。

総会後まず、卯本重郎教授から大学の近況と卯本教授グループで目下開発研究中のMHD発電のパイロットプラント構想についてのお話を聞きました。次いで本年米寿を迎えられた本多静雄支部長に対し、田中卓二先輩が出席者一同を代表しての祝辞が述べられ白寿までのご健勝をお祈りしました。つづいて恒例の新入会員歓迎会となりましたが、中電2名、日本電装2名、トヨタ自動車1名、計5名の新入会員のうち成瀬高彦君（日本電装）1名だけの出席は実に淋しかった。そしてこのあとい

よいよ本格的な懇親会に入りました。まづ川端太郎先輩の発声で一同乾杯の歓声をあげビールをのみつつ例によって出席者から順次興味ある自己紹介がつづきなごやかな雰囲気の中で旧交を暖めることができました。

そして最後は、新作狂言「三国山」のビデオを鑑賞しました。この狂言は本年の四月六日・七日猿投平戸橋の本多静雄邸で開かれた「花見と陶器を見る会」の催物として和泉流家元和泉元秀氏等により上演されたものをビデオに撮ったもので本多静雄原作の狂言です。内容は三国山明神の祭日に尾張と美濃の二人の陶もの師が「われこそは日本一ぞ」と口争いをしているのをみて祢宣が仲に入って拝殿の神人の像にご裁下のお伺を立てるという筋書きですが演半ばを過ぎた頃冠・狩衣・下袴姿に笏を手にした神人像として本多静雄氏が舞台に現れると一大拍手が湧きあがり、そして冠と笏の動きによる巧みな御託宣振りを興味深く鑑賞しました。かくて総会は楽しく終りました。（古田記）

第30回洛友会
四国支部総会報告

6月14日（金）高松市内の旅館「新常磐」において、第30回洛友会四国支部総会を開催した。本部からは、近藤名誉教授、木村教授、宇尾教授の御出席をいただき支部からは三十二名の会員が集まった。

総会は近藤先生の Wit にとんだ挨拶に始まり、今年予定されている名簿の改訂についてのお話、木村、宇尾両先生からの電気教室近況のお話の後、会務報告、予算案審議、新役員の選出を行ない無事終了した。引き続き懇親会に入り、先生方との歓談や久しぶりに顔を合わせた先輩、友人と酒を酌み交しながらの談笑など、楽しいひとときを過した。最後に全員が肩を組み恒例となった「琵琶湖周航の歌」の合唱で懇親会を終った。

翌日、近藤、木村両先生は、工事進行中の備讃瀬戸大橋を見学された後無事京都へお帰りになった。

以下は近藤・木村両先生を御案内した辻本先輩の随行記である。

〔昭53卒　安藤記〕

今回は、近藤、木村両先生を備讃瀬戸大橋の工事現場に御案内することになり、中川支部長（昭15）野中先輩（昭27）と共に同行させて頂いた。

当日（6／15）は、梅雨期にもかかわらず絶好の日和に恵まれ全員爽快な気分で、予定の午前10時に坂出の土木工事共同企業体の事務所に参集した。午前中には、現地の工事関係者の方々から説明を受け、既に殆ど終了している土木工事や、今後実施される予定のワイヤ工事の雄大さに感歎した次第である。

午後からは、好天の下に事務所のクルーザを出して頂いて海上からの坂出・下津井間の橋脚工事の様子を見学させて頂き、全員くつろいだ気分で連絡橋ルートを一巡することができた。

最後に、約30分程度で土木工事の最終段階の記録映画を見せて頂き、ケーソン工事の様子がよく判った。

幸い、両先生共、本工事にはかなり興味を抱かれた御様子であった。

以上のような次第で、現地を午後四時前においとまして三名で先生を高松駅までお送りし、夕刻五時半頃の国鉄連絡船にて御帰京頂いた。

〔昭37　辻本記〕

関西支部総会
開催される

六十年度の関西支部総会が、六月八日（土）に大阪中之島の関電会館で開催された。

当日は近畿地方に梅雨入りが宣言されたが、九州・四国地方に大

雨を降らした夜来の雨も昼頃にはすっかりあがり、総会開催時刻の四時にはむしろ汗ばむぐらいの天候となっていた。

総会は、貝野政弘総務幹事（二十八年卒）の司会ですすめられ、まず最初に、濱口俊一支部長（二十年卒）から、『大先輩から若手までの年代をこえた会員間の「タテ」の糸としての役割をはたすべく活動をすすめてきた。

当支部の最大イベントである家族見学会では、一昨年、琵琶湖ミシガン遊覧を企画したところ三百名を超える申し込みがあり、不本意ながら参加をお断りしなければならなかった程盛況であった。昨年の関西電力山崎実験センター見学の際には、我国最大の五十キロワット集光式単結晶シリコン太陽光発電を目の前にして熱心な質問がとび出し、予定の時間をオーバーするなど有意義な企画と好評を得た。

また、ゴルフの会では、活動が中断していたシニアー部をジュニアー部と一体化し、組数も八組から十組にふやし、十八年卒から五十五年卒の幅広い会員の参加をえるなど「タテ」の糸としての役割をはたすことが出来た。

しかしながら本日の総会を初め囲碁将棋麻雀の会での低調さは改善出来なかった。今後は会員のニーズに合致した方向でさらにちからを入れていく必要がある』、と挨拶があった。

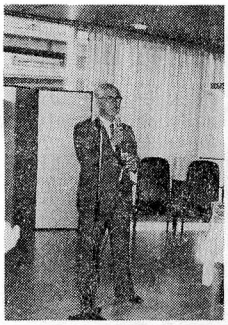
つづいて五十九年度の報告と六十年度の計画が了承され、そのあと役員の選出が行なわれた。

本年は現役員選任後二年目の改選期にあたり、審議の結果、新支部長に藤本一夫氏（二十一年卒）新副支部長に宇野敏一氏（二十五年卒）、新総務幹事に根来恵作氏（二十七年卒）、新会計幹事に八木晋一氏（三十三年卒）がそれぞれ選任された。

新支部長に就任挨拶にたった藤本氏は、『本会発足当時にはとても手のとどかないと思っていた米国が今や貿易摩擦の対象となっている。これもひとえに会員の努力の賜物と思っています。各企業のトップと大学の先生方をメンバーにもつ本会をさらに活性化させ、日本の発展、世界の発展に寄与していきたい』、と抱負を述べ満場の拍手をあびた。

総会後、創立以来続いている立食パーティ形式で懇親会がおこなわれた。

懇親会は大谷副会長の乾杯ではじまり、例年になく、ビール、ウイスキーの消費量が多く、そこかしこで快談がみられ、予定の時刻を大幅に過ぎた六時四十分、新支部長の万歳三唱にてお開きとなった。



古き都に幾歳を
ともに学びし同窓の
今日なつかしきこの集い
青春の日はよみがえる
（作詞作曲　松田長三郎
洛友会の歌より）

同窓会便り

昭和六十年
十四日会大会

今年は大正十四年卒業後満六十年、大正十五年卒業には六十年目に当るので、去五月十四日洛北一乗寺の曼珠院で、恩師達、同窓達の追悼法要が催された。

すべて口羽玉人氏の行届いたお世話で、五月十四日午後、京都駅前新阪急ホテルに集合（会員十四人、准会員十三人）、そこから貸切バスで曼珠院に赴き、門跡山口円道師の導師で叮重な追善法要が営まれた。特に会のために尽力された佐々木・木津・大久保・平井・宮田諸氏、最近引続いて物故された一本松・橋本両氏のことが偲ばれた。

京大十四日会六十周年記念　S60.5.14.　於　京都新阪急ホテル

その夜は羽村先生の御臨席をお願して、新京阪ホテルで会食懇談、翌十五日は京都御所建礼門の前の観覧席で葵祭の行列拝観、優雅な王朝風俗を観賞した。そこから京大会館に行って中食の後、来年の再会（多分志摩の予定）を約して、京都駅で解散した。

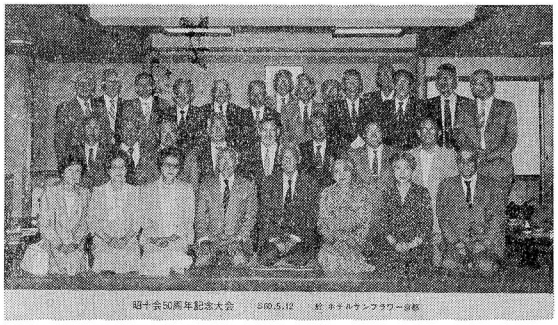
（60・5・16）　（小宮記）

昭十会五十周年
記念大会開催

昭和十年卒業の私共は薫風爽かな五月十二日（日）の吉日をトして京都市内のホテルで五十周年記念の会合を持ち有志の講演や会員各位の近況報告等にてお互の情報交換と旧交を温め更に夕刻より恩師松田（御欠席）羽村両先生の御臨席を仰ぎ一同会長懐旧談に興じ夜八時半頃盛会裡に解散した。

翌十三日（月）は或はゴルフの腕を競ひ或は観光に夫々久々に京の風情を満喫し引上げた次第である。出席の会員は次の通り（24名敬称略）。

天野、有馬、井上、大曲、萩野（二）、神谷、北村、城戸（二）、黒田（二）、小寺、佐々木、塩沢、染田、田村、高木、殿井、中沼、



昭和三〇年卒業生 三〇周年同窓会報告

『ゴルフて楽しいもんやね！』で我々昭和三〇年卒業生の三〇周年同窓会は開始された。冒頭の一言は今回の同窓会出席のためわざわざカナダから馳せ参じてくれた飯塚啓吾君（トロント大学教授）の、しかも何とこの日が筆下しとなった記念すべき発言である。時は五月二五日（土）、場所は伊豆半島の大熱海国際ゴルフクラブ大仁コース。天候はあいにくで時折強い雨にたたられたため、言い訳の種にも事欠かない楽しい一日であった。ゴルフ参加は一九名。

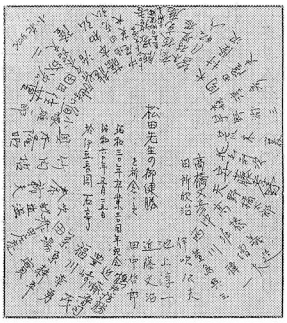
引続き場所を伊豆長岡温泉の石亭に移し、夕刻から恒例の懇親会を開催した。京都から田中哲郎、近藤文治、池上淳一の三先生の御出席を得て同期生三九名、楽しい一夕を過した。席上、近藤先生から松田先生の御近況を拝聴し、松田先生が『是非出席したい』と仰しゃっておられた由のお話を伺い、一同感激したことであった。宴会の最後は、これまた遠路ソウルから参加の近藤晋司君が松田先生の御健勝を祈念して、元気一杯万才で締めてくれた。

その後、これも我々の恒例であるが、二次会用に予め開放されている一室に多くの同期生が再び三先生を囲んで集り、話に花が咲いた。気がついて散会したのは、もう一時を廻っていたように記憶している。最後まで同期生と御一緒下さり、示唆に富んだお話を頂いた三先生に重ねて御礼申上げる次第であります。

ところで、今回はもう一つ感激的なイベントがあった。同僚の佐々木昭夫先生（京大）が、三二年前我々が電気工学科に配属された当時の懐しい写真をコピーして配ってくれたのである。少しでも鮮明になるようにと何度も写真屋にやり直させた由。当時の現物を失くしているに違いない同期生にはまたとないお土産となった。佐々木先生ありがとうございました。

翌日五月二六日（日）は、三先生の御出発をお見送りの後、次会を約して散会、初夏も近い伊豆を楽しんだ。

最後に、今回は北島利次幹事長を中心に、添田庄亮、藤本和弘両中堀（二）、林、藤本、山上、和久利、黒田（二）、以上（和田記）



卒業17周年 同窓会報告

（昭和43年卒）

卒業して17年、同級生の現況は如何との想いが大きくなりつつあるとき、京都大学に残っている石川順三（電子）・富田真治（情報）両君が幹事となって第1回同窓会が企画された。何しろ、卒業後初めてのことであるので、懐しの楽友会館で4月13日（土）午後に集いをもつことになった。

当日、集って来たる者31名、会は両幹事の挨拶に始まり、乾杯、各人の自己紹介へと進んだ。光輝くばゆい者、ロマンスグレーの道を歩む者、未だとうの立った学生にとどまっている者など、17年間の変化の差は大きく、まず互いにその変貌に目を見張っていたが、話が弾んでくるや、たちまちのうちに学生気分を取戻し旧交を温め合った。料理を食べるよりも、皆、話す方に忙しく、閉会予定時刻直前になって、料理をもっと平らげるよう、催促がなされるほどであった。

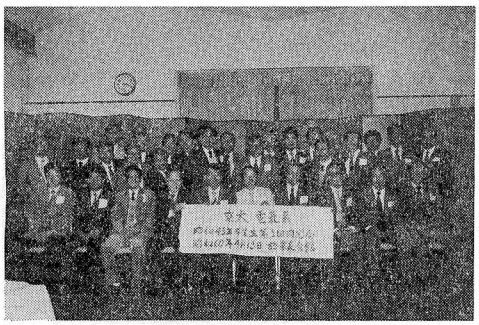
夕方になり、楽友会館を出て、皆で電気系教室の方へ歩いたが、京都大学の変容ぶりに驚くと共に、昔のままの建物にはなつかしく想い出を語り合った。電気系教室の中庭では卒業記念の桜の木のまわりに集まり、電気系教室と相談の上、昭和43年卒同窓会としてさらに桜の植樹をすることに決め散会した。

第2回同窓会は来年（昭和61年）6月6日東京にて開催することにし、日立グループの天野隆喜君に世話人としての労をとっていただくことにした。（野木記）

村、佐々木、西川の現役の先生方など多くの同期生の協力で無事開催できたこと、次回三五周年は関西の同期生にお世話をお願いする運びになっていることを付記して報告と致します。

（葉原耕平記）

君など関東勢をはじめ岡田、木



大正年代洛友デルタ会会員
住所不明者の取扱いについて

前号（4月号）会報において公告しましたとおり、題記の不明者は本年12月発行の名簿から死亡者扱いとなります。名簿上で住所不明になっているが、同級生などで交信のある会員各位は、その生存を確認の上、神戸俊夫（講昭14卒）又は、洛友会事務局までご一報くださるよう再度公告します。

（神戸記）

会員寄稿

西安シルクロードの旅 ④

昭和7年　鈴木　茂

8月9日

早朝の一刻を市街散歩をした。党河の東側にある現市街は、清代（一七二五）に造られた。敦煌故城は三・三km離れた地にあり城壁の一部が残るに過ぎない。

敦煌は春秋時代は瓜州と呼ばれ羌戎という民族が住む。戦国時代には月氏に代り東西交易の仲介をし西域から玉を東へ、中原からシルクを西へ運んで莫大な利益を上げた。

月氏を遠く西へ追い交易の利権を奪ったのが匈奴で河西からタリム盆地を支配下に収めた。

漢の初期は匈奴に対し屈辱的関係に甘んじたが、武帝の治世に名将霍去病の率いる遠征軍を派遣し匈奴を駆逐した。これが紀元前二世紀の事である。

河西四郡がおかれ瓜州から敦煌と改名される。因みに現在は別名を沙州と呼び、瓜州は安西を指す。役所がおかれ屯田兵が駐屯し東西交易の促進を計った。

絹織物、麻、漆、鉄器等の手工業品や、農業、水利、養蚕、製紙等の技術が東から西へ、葡萄、ザクロ、クルミ、クローバ、胡瓜等や玉、ガラス等の物産や、音楽、舞踊、曲芸等の文化が西から東へと伝来した。

敦煌は漢の西域経営の拠点として、又文物交流や漢文化の中心となり一四世紀迄繁栄を続けた。

西方九〇kmの地点には、秦代に築かれた玉門関跡、その南には漢代に築かれた陽関跡がある。

陽関は唐代の詩人が、〝君よ尽せ一杯の酒を、西のかた陽関を出おれば故人無からん〟と詠み込まれた地である。

タリム盆地への出入口であり、前線基地であり、当時の漢人社会の西限であった。

朝食をすませ、敦煌に別れを告げ柳園経由で蘭州へ向う。市外へ出ると公路は一直線に東北へ砂漠の中を延びる。柳園までは一二〇kmあるが、その間幾何学的にも一直線の部分が一〇〇kmあるという。しん気楼が現れ遠方の山が湖水に浮ぶ島の様に見えた。所々の草原には駱駝が放牧されていた。

一二・〇〇　柳園に着く。鉄道の開通と共に新しく発達した小都市らしい。此処で酒泉から行を共にしたガイド氏と別れた。

一四・三〇　ウルムチ仕立ての北京行の特快（特急）車に乗る。間もなく三蔵法師が咽喉を潤したと伝えられる疎勒河を渡る。河幅は非常に広いが流れる水は少い。祈連山脈に源を発し西流してタリム盆地に消える河である。

夕方、嘉峪関城を過ぎる。城壁と城門が夕空にくっきりと姿を現していたが、万里の長城らしいものは目に入らない。

嘉峪関市の西には玉門市があり、その奥には玉門油田があるというが車窓からは見えない。玉門油田は中国で最初に発見された油田である。

河西通廊の景色も二度目は退屈である。この辺の日没は二〇・〇〇以後になるので長い午後になった。

8月10日

鳥鞘嶺駅を過ぎると黄河流域に入り鉄路は降り勾配になる。表土は黄土に変り最早砂漠ではない。山肌は疎らに生えた草に覆われ山間の平地は耕され風景も幾分は和らぐ。

一二・三〇　蘭州へ着いた。青海省に源を発する黄河は山間を東に流れて峡谷を造り、その細長い平地に市街があった。

河西通廊への入口であり、黄河の渡河点でもありシルクロードの中継点として栄えた都市であった。秦代はこの辺までが中原で金城と呼ばれ、隋代に蘭州と改名され、現代文字では簡略化して羊州と書く。

市街の中央を黄河が貫流するこの市は、甘粛省の省都であり、石油関連の工業都市であり、人口は二〇〇万を等する。羊州賓館に旅装を解いた。

黄河の河幅は三〇〇mもあるだろうか？　赤褐色の濁水が河幅一杯に滔々と流れ、河を跨いで鉄歩道橋が架けられる。河南の山が白塔山で、山腹には仏、儒、道教の寺院が隣り合って建てられていた。河北の山が玉泉山で霍去病が遠征の途次立寄って清水の少ないのを憂えて鞭で五回大地をたたくと水が涌き出したと伝えられる跡が残る。何れも市民の行楽地となっていた。

市内には、この地方の出土品を展示する博物館があり、郊外には石仏のある炳霊寺があるが、今回は訪れる余裕がない。

市街は商店が軒を並べ殷盛であった。羊州賓館は宏壮であったが、泊り客は吾々一行だけで他に客はない。冷房はなく、浴室はあっても温水は出なかった。

海抜一、五〇〇mの高地であるが、矢張り暑かった。

四・三〇起床、五・〇〇宿舎を発つ。四日前羊州站へバスを急がせた道を反対に空港へ向う。軍民併用の空港は高原に在って、さすがに朝の冷気は身に泌みた。ガイドの方女史と此処で別れた。家庭には夫君と母親と双生児の男女の二子が待つという。

七・四〇発のトライデント機で西安経由上海へ向う。乗客には敦煌のホテルで同宿した内外人の顔が見えた。一二・一〇上海へ安着

した。

十一、十二の両日を上海、十三日を蘇州観光に費し、十四日に帰国した。

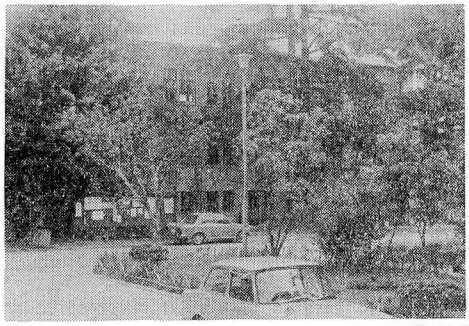
敦煌には空港が完成しており、秋からは航空便で行けるように成る。

莫高窟は文物管理委員会が管理して、補修に努めて居るので今後の観光は便利になり、内容も充実して行こう。

飛行機も、鉄道も時間を守らず、宿泊設備も良いとは言えないが、旅行中接触した中国の人々は皆親切であった。日本語の多少とも判る人は元より、その他の人々も積極的に吾々に話しかけて来るのは甚だ印象に深い。（完）

ヒマラヤ杉のつぶやき①

講昭和13年卒　竹村　清



わしら二人も長い間生きてぬいてきたものだ。ついこの間のように思える四十年前の終戦の時も今日のように暑かった。

雲一つない真夏の空には太陽がギラギラと輝き昨日までのザワツキがウソのように静かな昼下り。

〝玉音放送を聞いたか〟〝いや聞いていないが何かあったのか〟〝ついに戦争が終ったらしい〟という人声がヒソヒソと聞えてくる。わしら二人はソッと顔を見合わせささやいた。わしらはここに十何年間も住みついているヒマラヤ杉だ。

世間の人たちがやれ空襲だ、疎開だと騒いでる間もジッとこの京都帝国大学の構内東北隅電気工学講習所の前に住んできて根を生やしたのだから、そう簡単には疎開をするわけには行かない、爆撃されれば死なばもろともと覚悟はきめていた。あれからもう四十年も経ったのか。

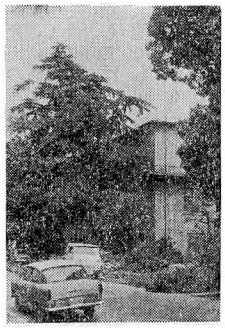
話を少し前にもどしてわしらの生い立ちから始めることにしよう。そもそも電気工学講習所が大正三年一月に電気工学教室内に開設されたときはわしらは未だ影も形もなかった。

それから十四年目の昭和二年秋に二階建ての鉄筋コンクリート校舎が完成した時には、わしらはここに住んでいて幼ナジミだったので二人でよく話し合ったものだ。

〝四角い変な物が出来たゾ。日当りが悪くなって困ったもんだ〟〝夜になると二階では大勢の人が熱心に何か講義を受けているらしい〟〝一階では、モータはブンブン廻っているし、変なランプが、沢山点滅してガヤガヤと話声が聞こえるが一体何をしているのだろう〟と最初の内は物珍らしさにつれられて話し合っていたが、夜の騒音には悩まされたものだ。

当時の世の中は、やれ緊縮政策で不景気になったとか北支の盧溝橋で満鉄が爆破され、日支の雲行があやしくなったとか、何かと世情不安で物騒な世の中だった。

しかし、この四角な三階建の教室で夜間に勉学にくる学生たちの真摯な姿は、いつの時代でも変らなかったものじゃよ。



そうこうしている内に昭和十五年世の中は紀元は二千六百年だとか、八紘一宇だとかいいはやされていたがこの頃妙なことを耳にした。電気工学講習所が大学の講内から立命館大学の方へ移転するらしい。名前も日満高等工科学校になるとか……。

そうなるとこの建屋はどうなるのだらう。もし取りこわしにでもなればわし達も切り倒されるのではなかろうかと、色々な不安にかられたものだった。

その内に今まで講義室に使われていた二階や三階にわしらが今まで見なれない実験用機具が続々運びこまれたのでやっと建物の取りこわしはまぬがれたらしい。何でも〝石油の一滴は血の一滴〟とかいうことで当時燃料化学の実験室になったらしい。やれやれこれでわしらも無事にここに住みつけることになった。

わしらがここに来たときは建物の日影でウットウしかったが、それから十五年お山の杉の子ではないが、大地に根を張り立派に成長して身の丈は三階の建物を見おろすまでに大きくなっていた。

忘れもしない昭十六年十二月八日ラジオが大本営発表として〝大日本帝国は本日未明米英支蘭と戦闘状態に入れり〟と何度も何度も繰り返えしていたことを……

その頃から三階に時々軍人さんが出はいりするようになった。何でも三階の講師控室が実験室になり、セレン整流器の研究をやることになるらしいとの風評を耳にした。

開戦から一～二年は連戦連勝で毎日のように景気のよい軍艦マーチが戦勝を告げていたのをはっきりと覚えている。しかしそれから一年戦況の雲行があやしくなり、毎晩のように防空演習や灯火管制の予行演習が行われたものだ。

奇妙なことにこの三階建の建物だけは夜の防空演習の時もコウコウと電灯が付いており、時々警防団の担当者がメガホンで灯火管制であるから遮光するようにドナッていたっけ。わしらは何か緊急の研究でもやっているだろうか？と二人でヒソヒソと話し合っていた。

昭和二十年八月十五日、忘れることのできない日である。

長くて辛かった日々がやっと終ったのだという安堵感と、これから行く先どうなるのかという不安が交錯した何とも表現の仕様もない虚無観にさいなまれたものだった。という感情を人間達は持っていたろうが、わしらにとってはかかわりのないことだった。

人間どもはヤレ食料が無い、ヤレ栄養失調だとか大騒ぎしていたがわしらは大地に根をおろし、自然の大気を吸ってスクスクと成長して行ったものだった。

その頃三階建の建物では、石油化学教室と名前をかえた実験室として研究が続けられていた。もう今では、昔の電気工学講習所という学校の面影はどこにも見られず、勤勉だった夜学生の代りに白衣の研究者が二・三階の実験室に出はいりしていたが、一階は相変らず工学部の電気工学実験で白衣を着た学生達がいつも実験していたのを覚えている。

昭和三十七年春、わしらが住んでいた所の西側に長年近所付き合いをしていた、一階建煉瓦作りの電気教室北実験室が取りこわされ、何んでもここに電気工学第2工学科が新設されるのでこの新館と電気総合館という立派な四階建の建物が建つらしいという噂を耳にしたのはそれから間なしのことだった。

それから一年目の昭和三十八年春に堂々とした風格をもつ二つの新館が完成した時には、わしらが長年見なれて来た三階建の建物がいやに見すぼらしく古くさく見えた。しかしこの建物はわしらの幼ない頃から四十年間見なれているのでいつまでもこの前でお付き合いをしようと心に誓った。

これらの新館が出来てから二年目の昭和四十年には学園紛争が勃発し、わしらも随分と迷惑したものだった。翌四十一年には一階の共通実験設備も電気教室の本館へ引越してしまった。

この紛争もやっと納まった昭和四十四年には化学総合館が構内の西北隅に完成したとかで三階建の実験室が全部そちらへ引越してしまった。

今まで多くの人が出入りしていた建物が空き屋になると妙に物淋しくうらぶれた感じになるものだ。

わしらがここに住みついて早や四十数星霜、じっとこの三階建の建物の前で住んで色々なことを見て来たが、この建物が遂に取りこわされるという大事態が発生することになった。昭和四十六年の梅雨が過ぎ夏も真近かな頃である。何でも電気系工学教室から情報工学科が分離されて新しい教室が建てられるとの事である。この時にはわしらもこれで遂に五十年半世紀近く生き続け今では一抱えもある大木に育ったこの命脈が絶たれるのではないかと観念したものだった。

奇妙なことにわしらの下半身は、菰にくるまれひも縄でぐるぐる巻きにされたことである。まさか死出の旅装束であるまいと二人でいい合ったが、後日譚になるが三階建物取こわしと新教室建設に際しては、わしら二人に対して（他にも同僚がいたが……）可能な限り根を切らないこと、幹にキズを付けないよう等〝養生〟を施すという条件が工事業者に付けられていたことを後で知り、その温情に対して涙を流して感激した。

九月の始め遂に運命の日が来た。クレーンの先から直径四〇cmもあろうかと思われる鉄球をチェーンで釣り下げられたクレーン車がやって来た。工事が始まった。二～三回反動を付けた鉄球が猛烈なスピードで三階建の盟友の壁面にブチ当る。その度ごとに悲鳴に近い轟音を立て壁面が柱がくずれ断末の音が耳をつんざく。

見てはおれない!! 半世紀近く数々の人材を育て、また、立派な研究成果をあげた学び舎が研究室がこのわしらの目の前で見るも無残に断末の悲鳴と共にくずれ去る。正に断腸の思いである。

アーア盟友よさらば!!

二日もすれば建物は後かたもなく残るは盟友の残骸だけである。

（以下次号）

（注：掲載の写真は、いづれも元電気工学講習所校舎が取除かれる前に情報工学科矢島教授が撮影されたものを、同教授のご厚意により借用したものである。）

事務局だより

名簿発送についてのお願い

既にお知らせのとおり電算化名簿第二版は、昭和六十年十二月上旬に発行されますが、本名簿は五十九・六十年度会費納入会員に〝書籍小包〟としてご送付致します。

昭和五十八年度に発行しました第一版を発送しましたところ、受取人不在のため〝局留置〟になり、この留置期間が過ぎても受取られないので返送されて来たものが多数ありました。

ご承知のように〝小包便〟が〝局留置期間〟を経過しますと自動的に発送者（洛友会事務局）に返送されて来ます。この場合封書やはがきの返送の場合は無料ですが、〝小包便〟の場合は返送料として発送時と同額（今回の場は三〇〇円）の返送料を事務局が負担しなければなりません。

送付した会員の住所が判明している以上、再度発送しますのでこの場合の送料が三〇〇円必要になります。しかもこの場合封筒の取替、宛名記入、紐かけ等相当の時間を要します。

事務局の仕事とはいえ〝無駄な経費〟（初回発送時三〇〇円、返送料三〇〇円、再発送時三〇〇円計九〇〇円）と手数を省くため、もし万一ご不在の時に配達されて〝局留置〟の連絡がありましたときは、ご面倒ですが指定郵便局へお出掛の上、お受取くださるようお願い致します。

編集後記

変則的な梅雨もやっとあがり、いよいよ男性的な真夏の季節となりました。会員諸賢には如何お過しでしょうか。今年も各支部総会も順調に終りましたが、毎年各支部総会にご出席になります松田会長がこの時期一時的に体調をこわされ各支部共欠席されましたので、会長の様子を総会の席上問われましたが、その後お元気になられ各会合にご出席になっておられますので紙面をかりましてお知らせ致します。

〝西安シルクロードの旅〟もやっと終結しました。紙面の都合で分断掲載されましたことをお詫び致します。

訃報

講大6	井上　市衛	60・6・14
講大8	田伏龍太郎	60・6・1
講大10	河野　仁	59・10・17
講大13	坂口　惣一	59・12・24
大15	永原　勘次	60・4・5
昭2	岩本　種昌	60・5・8
講昭5	辻　治門	59・12・8
昭6	大谷宗太郎	60・3・24
昭6	加藤　一陽	60・3・29

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。